

ロータリーの歴史から学ぶ

3. Guy Gundaker から学ぶロータリー

3) ロータリアンたる者、かくあるべし

この項目は、他の項目と重複する内容が少なくありません。特に前段の「2) ロータリークラブの構成と諸目的」や「5) 自己の職業分野と社会に対するロータリアンの義務と責任」との重複は、かなり多いです。本項では、重複部分については簡単に記しながら、“ロータリアンたる者、かくあるべし”という Guy Gundaker の思い（気概）を中心に解説していきます。

Guy Gundaker は本書の中で、ロータリアンたる者は次の4つについて明確な回答を持ち、かつ実践しなくてはならないと述べています。



<ロータリアンたる者>

1. ロータリアンにとって「**例会出席**」とは？
2. ロータリアンにとって「**活動**」とは？
3. ロータリアンにとって「**利益**」とは？
4. ロータリアンにとって「**究極の目的**」とは？

<1> ロータリアンにとって「**例会出席**」とは？

Guy Gundaker は、ロータリーに「欠席」は有り得ないことを強調しています。ロータリーの入会者に対しては、「名誉あるロータリアンという地位を引き受けた以上、すべてのロータリーの例会へ常に出席する義務を負う」ことを必ず告げなければならないと述べているのです。

会員選考についても、以下の①～④の人物像について申し分ないことが何よりも大切であるとした上で、それ以外に⑤と⑥に匹敵する人物であることも、ロータリー入会の必須条件として挙げています。

<ロータリー入会の必須条件>

- ① 会員候補者が、事業の管理者であること。
- ② 当該事業所が、その職種における指導的立場にあること。
- ③ 人柄が高潔で、誰からも信頼・信用されている人物
- ④ 社交性がある人物
- ⑤ 入会后、ロータリーの会合に出席を欠かさないであろう人物
- ⑥ 入会后、ロータリアンとしての実践活動を怠らないであろう人物

それにしても、この「ロータリー入会の必須条件」は見事です。当地区の伊藤巳規男パストガバナーは、「ロータリアンになれる人にだけ、ロータリー入会を薦めなさい」と口にされます。それは、「ロータリーへ入会する以上、①～④は当然だ。しかし、それらだけではロータリアンとは言えない。⑤と⑥も確かな人こそが、ロータリアンになれる人だ」という意味だそうです。伊藤巳規男パストガバナーの言葉は、蓋し名言です。

Guy Gundaker は、⑤の「入会后、ロータリーの会合に出席を欠かさないであろう人物」について、次のように解説しています。すなわち、「ロータリー入会后に欠席が多い者に対しては、入社後に欠席が多い社員が退職させられるのと同様、罷免など、厳しい断固とした措置をとるべきである」と述べているのです。その上で、出席率の高い会員こそが、クラブにとって大きな財産であり、退職や転職以外の理由で絶えず入会や退会が繰り返されるクラブは、衰退する運命にあると述べています。言い換えれば、例会に欠席が多い会員はクラブを衰退させるので、入会させてはならないということです。まさに、Guy Gundaker のロータリーに対する強い思い入れを感じさせる内容です。

さて、⑥の「ロータリアンとしての実践活動」についてですが、その内容は次項で詳しく説明します。

< 2 > ロータリアンにとって「活動」とは？

Guy Gundaker は、ロータリアンとしての活動は以下の4つであると述べています。

<ロータリアンとしての活動>

- ①個人としての活動
- ②ロータリークラブにおける活動
- ③同業者の団体における活動
- ④公共的かつ慈善的奉仕

①個人としての活動

皆さんは、①の「個人としての活動」というのはプライベートな生活を指しているのだろうと思ったのではないのでしょうか？ ところが、そうではないのです。

Guy Gundaker は、ロータリアンの個人としての活動とは、「ロータリーが説く高い倫理基準と様々な奉仕を、ロータリーの理想と実践という目標を常に留意しながら、自己の事業や専門職務において実践することである」と述べています。「高い倫理基準と様々な奉仕を、自己の事業や専門職務において実践する」のですから、これはまさに職業奉仕です。

要するに、「個人としての活動 = 自己の事業や専門職務において職業奉仕を実践すること」という意味です。その上で、彼は、このロータリアンの個人としての活動こそが最重要であると強調しているのです。

Guy Gundaker はまた、「ロータリーは向上運動以外の何物でもなく、向上の成否は『道德律（職業倫理訓）』で述べられているロータリーの諸原則を、ロータリアンがどこまで実践するかに懸かっている」と述べています。言い換えれば、「ロータリーとは、自分自身を、事業を、業界を、そして社会を向上させる運動（下記の第1～4）に他ならない。そのためには、ロータリアン一人一人が自己の事業や専門職務において『道德律』を実践しなければならない」ということです。

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

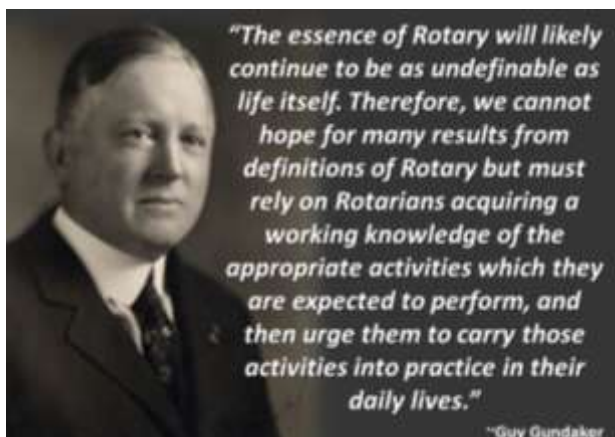
- 第1. 会員一人一人の向上
- 第2. 会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）
- 第3. 会員の職種・業界全体の向上
- 第4. 会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

その上で彼は、「ロータリアンは、安心して取引のできる人であることを世に知らしめなければならない」と述べています。だからこそ、「全てのロータリアンは、信頼と奉仕の象徴として、いつもロータリーのバッジをつけなければならないと強調しているのです。」これも、Guy Gundaker のロータリーに対する強い思い入れを感じさせる内容です。



②ロータリークラブにおける活動

Guy Gundaker は、ロータリークラブ内部での活動は二番目に重要であると述べています。その活動の中身とは、討論であり、意見交換または情報交換であると明記しています。



彼は、「ロータリアンは、例会で提起される全ての問題について積極的に討論しなければならないし、自らの事業または専門職務について話す機会が提供されなければならない。例え、昼食や晩餐の場であっても、意見の交換が行われなければならない。こうした会合は、困難な問題に対して別な角度から解決の糸口を与え、職業を異にする者から有用な情報を提供されることも多いのである」と述べています。

その上で、「一業種一会員制のおかげで、ロータリアン同士の話し合いは、実業家がお互いに意見の交換をする場合よりも、うちとけ合って話をする事ができる」と述べています。

要するに、Guy Gundaker の主張は「クラブにおけるロータリアンの活動とは、例会で会員同士が討論、意見交換、情報交換などの話をする事」であり、「一業種一会員制がもたらす会員同士の親睦や敬愛の繋がりの中、自分の仕事に参考となる意見や情報をより得やすいというメリットを、十分に活かすべきである」というものです。だからこそ、彼は「クラブがロータリー運動においてどのくらい価値があるかは、ロータリアンがクラブの例会にどのくらい積極的に参加するかに懸っている」と述べるのであり、その基本となる「例会出席」を何よりも強調しています。

高度情報社会と言われる現代社会では、Guy Gundaker が活躍したロータリー草創期の 100 年前に比べれば、クラブ例会で自分の仕事に参考となる意見や情報を得やすいというメリットは少ないかも知れません。しかし、地域を代表する、かつ功成り名を遂げ、奉仕の精神に満ちた事業主が集まる例会であるからには、互いの話を通して自分の事業訓や生活信条に良い影響をもたらす機会はあるはずです。少なくとも私は、そういう機会を通じて人間的にも成長してきました。私は、例会の中に会員同士が胸襟を開いて真摯に語り合う時間をもっと設けるべきだと思います。

ロータリー章典でも、「クラブは、クラブ用務、活動、クラブ行事について、討議のための例会を定期的に関くように奨励」されています。例えば、クラブ協議会、特別なテーマでのクラブフォーラム、周年事業のための討論会などが、これにあたります。皆さんのクラブでは、こうした討議のための例会は定期的に関かれていますでしょうか？



③同業者の団体における活動

Guy Gundaker は、「ロータリアンが同業者組織の会合に出席するということは、ロータリーがその業界へロータリー大使を派遣したということなのだから、当然、その大使としての役割を果たさなければならない」と述べています。その「ロータリー大使としての役割」とは、もちろん、高い職業倫理基準と奉仕理念を伝えることです。

言い換えれば、同業者の団体におけるロータリアンの活動とは、ロータリーからの大使として高い職業倫理基準と奉仕理念を業界に広め、その業界をより良くしていくということです。この考え方は、Guy Gundaker 自身のロータリー観における大きな特徴の一つでもあります。

なお、この「大使」という考え方は、前の項目「2) ロータリークラブの構成と目的」で、「ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成」されるという表現に対応するものです。

<ロータリークラブの構成と目的>

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

- 第1. 会員一人一人の向上
- 第2. 会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）
- 第3. 会員の職種・業界全体の向上
- 第4. 会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

④公共的かつ慈善的奉仕

Guy Gundaker は、「ロータリーは、会員をより良き市民に、また所属同業者団体のより良きメンバーに成長させるための訓練の場である。したがって、ロータリアンは、その地域社会において、業界団体において、また慈善団体において、積極的に価値ある行動をとらなければならない」と述べています。要するに、ロータリーの教育的性格（訓練）を強調した上で、「入りて学び（→訓練の場）、出でて奉仕（→積極的に価値ある行動）」を説いているのです。

決議 23-34（冒頭の文章）

ロータリーにおいて社会奉仕とは、ロータリアンのすべてがその個人生活、事業生活、および社会生活に奉仕の理想を適用することを奨励、育成することである。

ロータリーの目的（第3）

ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること

また、上記の「地域社会において、業界団体において、また慈善団体において、積極的に価値ある行動」という考え方は、1923年の『決議 23-34 の冒頭の文章』、さらに現在の『ロータリーの目的の第3』に繋がっていきました。要するに、Guy Gundaker の思い（気概）は、ロータリーの根幹として生き続けているのです。

< 3 >ロータリアンにとって「利益」とは？

さて、前述のロータリアンとしての4つの活動、すなわち「①自分の事業の発展をもたらす個人としての活動、②ロータリークラブにおける活動、③同業者団体における活動、④公共的かつ慈善団体における活動」の成果として、ロータリアンはどのような利益を得るのでしょうか？

この問いに対して、Guy Gundaker は「それは、商品生産原価と販売価格との差額から生ずる利益のような、ちっぽけな物ではない」とした上で、「ロータリアンの利益とは、より立派で、より大きな人間となって、自分自身に対しても、同僚のロータリアンに対しても、そして社会全体に対しても、より素晴らしい奉仕を提供する機会が与えられることである」と述べています。その上で、彼は次の段落に「Service, Not Self」と「He Profits Most Who Serves Best」というロータリーの二つの標語（当時）を掲げています。しかし、標語を掲げただけで、標語に関する解説は何ら記されていないのです。

（なお、現在のロータリーの標語は、前者については「Service Above Self」に、後者については「One Profits Most Who Serves Best」に変更されています。）

私見ですが、この二つの標語について、Guy Gundaker は何ら異論を述べてはいませんが、心中は多少の違和感を抱いていたのではないのでしょうか？

先ず「Service, Not Self」についてですが、これは Benjamin Frank Collins の言葉です。その解釈については諸説ありますが、少なくとも Guy Gundaker は「Not Self」一辺倒ではなく、「Self」を決して否定してはいないのです。むしろ、「ロータリアンとしての活動(奉仕)」から得られる「利益」はロータリアン自身に属するもの(Self)であることを認めています。すなわち、ロータリアンの利益とは「より立派で、より大きな人間となること」であり、かつ「より素晴らしい奉仕を提供できる人間となること」であるとして、“人間性の向上”(Self)という利益を謳っているのです。言い換えれば、「Service, Not Self」よりも、「Service For Self」という一面を強調しているということです。



次に、「He Profits Most Who Serves Best」についてですが、これは Arthur Frederick Sheldon の言葉です。Sheldon の奉仕理論は「自らの事業を継続的に発展させるための学問的な企業経営の理念と実践方法」であり、あくまで経営上の「利益」を重視しています。それに対して、Guy Gundaker は「ロータリアンの利益とは、商品生産原価と販売価格との差額から生ずる利益のような、ちっぽけなものではない」と一蹴し、上記のように、“人間性の向上”という利益を強く謳っているのです。



実際、次項<4>の“ロータリアンにとって「究極の目的」とは?”において、Guy Gundaker は、“人間性の向上”という成長を通じて、“素晴らしい真のロータリアン”になることを最も重要視しているのです。もしかしたら、彼はロータリーの二つの標語を快く思っていなかったのかも知れません。

<4>ロータリアンにとって「究極の目的」とは？

Guy Gundaker は、この項目の最初の段落で「ロータリーは、人間の内面の体質を改善する。すなわち、ロータリーの中で体験を積み、成長することによって、素晴らしい真のロータリアンになっていくのだ」と述べています。そして、そのロータリアンの成長過程の例え話として、ナザニエル・ホーソーンによる素晴らしい物語「巨大な岩頭 (Great Stone Face)」を紹介しています。

その物語の内容については割愛しますが、要するに、我々が“ロータリアンとして深い思索、研究、奉仕の実践、差別なき友愛に満ちた交友”に明け暮れることで、「人としての成長は、必ず顔に現れる」の如く、素晴らしい真のロータリアンの顔になっていくのだと述べているのです。

Guy Gundaker は、次のようにも記しています。すなわち、「真のロータリアンになろうとする人達は、The Rotarian 誌、各クラブの出版物、国際ロータリー定款、道徳律、ロータリーの目的(綱領)などを真摯に熟読しなければならない。そして、差別なき友愛に満ちた交友に没頭し、事業経営理論を身につけるために、成長という名の努力を惜しんではならない」と一。

そして、彼は結びで「全てのロータリアンよ、ひたむきにロータリーを見つめよう。あるべき事業経営の真髓を求めて研究しよう。我々の生活を奉仕に満ちた貴重な時間で満たそう。そして、我々の心を差別なき友愛心で満たそう」と謳い上げ、「そうすれば、“ああ、この人達こそが真のロータリアンだ”と、世間は賞讃してくれるだろう」と述べているのです。

このように、Guy Gundaker が考える「ロータリアンの究極の目的」とは、世間から信頼され、尊敬される「素晴らしい真のロータリアン」になることだったのです。

追記：Guy Gundaker のロータリーに対する考え方の根幹

さて、ここまで解説してくると、皆様にも「Guy Gundaker のロータリーに対する考え方の根幹」が見えてきたのではないのでしょうか？ すなわち、ロータリーとは、ロータリークラブにおいては「訓練の場」であり、ロータリアンにおいては「人間性の向上」をもたらすものであり、仕事においては「事業の発展向上」に繋がるものであり、世間においては「世の中を良くしていく向上運動」であり、究極の目的は「素晴らしい真のロータリアン」になることです。それは、以下の「ロータリークラブの構成と目的」からも、如実に読みとれるでしょう。私は、Guy Gundaker が大好きです。

<ロータリークラブの構成と目的>

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

- 第1. 会員一人一人の**向上**
- 第2. 会員の事業の**向上**（現実と理想の双方において**向上**）
- 第3. 会員の職種・業界全体の**向上**
- 第4. 会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の**向上**

(2016年3月1日 初稿 2017年1月6日 最終改訂 文責：鈴木一作)